

# 南葵音楽文庫研究

## —— 南葵楽堂での演奏会の実態について ——

### A Basic Research of Nanki Library's Concerts

山 本 宗 由  
YAMAMOTO Muneyoshi

This study focuses on the concerts held in the Nanki Auditorium. Nanki Library (established 1902) is the first music library in Japan; it had a large and valuable collection of western music gathered by Yorisada Tokugawa, the 16th master of the Kishu Tokugawa family. The library was affiliated with Nanki Auditorium (established in 1918), which was one of the earliest concert halls with a concert organ in Japan. In the early twentieth century, there's no concert halls for western art music in Japan. For the reason, Nanki Auditorium became the place which was performed by various predominant players. However, little study has been done to Nanki Library's concerts.

This study reveals the two points about the Nanki Library's concerts through investigating the concert programs, newspapers, journal articles about the concerts and books written by Yorisada Tokugawa. First, Tokugawa held the concerts limited western art music as a high culture. Through the concerts, he aimed to provide opportunities for Japanese intellectual community. Second, in the auditorium, prominent players and orchestras performed; Tokyo Music School's players, Japanese military band, Japanese court musician, and foreign residents in Japan.

This study revealed that Nanki Auditorium was one of the main concert halls in Japan.

#### 1. はじめに

本稿は、南葵音楽文庫に併設されていたコンサートホールである南葵楽堂において、開催されていた演奏会の実態について明らかにすることを目的としたものである。1918（大正7）年に創設された南葵楽堂は、海外の音響設計の専門家に設計を依頼して、国内初のコンサートオルガンの設置も行うなど、ホールの設立時点から当時の他の演奏会場にはみられない特色をもっていた。しかし、現時点では南葵楽堂で行われていた演奏会の概要についてすら、十分に調査されていない状況にある。その理由として、ひとつには南葵楽堂が1923（大正12）年の関東大震災により、わずか5年という短い期間で閉鎖されてしまったことがある。南葵楽堂での演奏会は、創設者であった紀州徳川家第16代当主の徳川頼貞（1892-1954）が外部から演奏者を招いて行われるものであ

たため、5年間で行われた演奏会は20回ほどであり、数としては多いといえない。

演奏会が行われていた期間の短さから、これまで注目されてこなかったため、南葵楽堂に関する先行研究はほとんどないが、篠田(2010)が東京音楽学校と南葵楽堂で行われた「ベートーヴェン生誕百五十年紀年音楽会」に着目し、研究を行っている。篠田は演奏会のプログラムや、配布された解説をもとに、東京音楽学校と南葵楽堂の比較を行うことによって、その演奏会の意義について考察を行っている。篠田の研究では、南葵楽堂での曲目が東京音楽学校と同じであったことを指摘しつつも、当時ほとんど取り上げられることのなかったベートーヴェンの生誕記念演奏会を開催し、独自に作成した解説を配布したことを評価している。篠田の研究は南葵楽堂で行われた演奏会の一部を取り出したものであるが、他の演奏会についても評価を行っていく上で、まずは現状で未整理となっている基礎資料の整備が必要となる。

そこで本稿では、現存している演奏会プログラムの調査を行い、南葵音楽文庫で発行されていた事業報告書などと照らし合わせることで、演奏会の情報について整理する。そして、南葵楽堂の演奏会について掲載された新聞・雑誌記事と創設者徳川頼貞の自伝から、南葵楽堂で開催されていた演奏会の実態を明らかにする。

## 2. 南葵楽堂の設立

### (1) 西洋音楽受容と南葵楽堂の成立過程

南葵楽堂での演奏会について述べる前に、その背景となる明治期から大正期にかけての日本の西洋音楽の受容について、簡単に状況を整理したい。近代化を急いだ明治政府は数々の西洋文化を日本に取り入れた。それは音楽においても例外ではなく、西洋式軍隊の導入による軍楽隊の結成、音楽教育推進のための音楽取調掛の設置、式部寮雅楽課の雅楽伶人たちの洋楽学習などにより、急速に西洋音楽の導入が進められていった。また、キリスト教の解禁に伴うキリスト教音楽の普及も西洋音楽の受容に大きく貢献している。明治後期頃には演奏技術の基盤が向上し、ヴァイオリニストの幸田延(1870-1946)に代表されるような本格的な演奏家も登場してくる。さらに、日比谷公園の野外音楽堂が設立され、定期的に軍楽隊による演奏が行われるなど、西洋音楽を聴くことのできる場が増えてきていた。それに合わせて、学習院の音楽奨励会のような西洋音楽愛好家の集まりや、慶應義塾ワグネル・ソサイエティ・オーケストラを始めとした学生オーケストラの結成など、西洋音楽の普及は進んでいった。

大正期に入り、より一層西洋音楽の普及は進むことになるが、その一方で演奏会場のようなハード面は追いついていなかった。音楽専用のホールとして建てられたのは東京音楽学校の(旧)奏楽堂のみであり、その他では軍楽隊が拠点としていた日比谷公園野外音楽堂、青年会館等の講堂や教会などで西洋音楽の演奏が行われていた。この状況に対し、西洋音楽を音響環境の整ったコンサートホールで聴くことができるように建設されたのが、本研究で取り上げる南葵楽堂である。

南葵楽堂では当時の主要な西洋音楽の担い手たちが演奏会を行っていた。近代日本における西洋音楽の受容に寄与したものとしては、一般的には軍楽隊、音楽取調掛(東京音楽学校)、雅楽伶人

による洋楽学習、キリスト教による宣教活動の4つが挙げられることが多い。また、それに加えて外国人居留地における在日外国人によっても、西洋音楽の演奏活動が行われていた。さらに、大正期に入ると第一次世界大戦の影響から、白系ロシア人を始めとした著名な演奏家が日本を訪れることになり、各地で演奏活動を行った。南葵楽堂には、上述したすべての種類の演奏家が関与しており、当時の日本の西洋音楽に関わる人々が集中する演奏拠点となっていた。それを成し遂げたのは、設立者である徳川頼貞の、イギリスへの音楽留学を通して得られた西洋音楽の素養と、国内外の社交界で築き上げられた幅広い人脈によるものであった。

## (2) 徳川頼貞の音楽堂設立計画

南葵楽堂を創設した徳川頼貞は、幼少期からレコード<sup>1</sup>を通して西洋音楽に親しんでおり、西洋音楽に対する関心を強く持っていた。ピアノやヴァイオリンを嗜んだほか、学習院中等科時代には、田村寛定（1883-1934）を中心とした音楽愛好家グループに入っていた。このグループは、1910（明治43）年10月には音楽奨励会となり、1929（昭和4）年に解散するまで多様な洋楽演奏家を招いた演奏会を主催していた。頼貞は後に同会の幹事も務めており、南葵楽堂においても音楽奨励会主催の演奏会が催されている。そして、頼貞の音楽堂設立の契機となったのが、1913（大正2）年～1915（大正4）年のケンブリッジ大学への留学である。

ケンブリッジ大学で音楽学を学ぶ傍ら、数々の演奏会に出掛け、一流の演奏家たち<sup>2</sup>とも交流を深めた頼貞であったが、その経験の中で、日本にも本格的なコンサートホールを建設したいという思いが生まれるようになった。そこで、社交界での交流の中で紹介された、専門的な音響知識を持つブルメル・トーマス Brumwell Thomas（1868-1948）<sup>3</sup>に設計を依頼することになる。

実際に完成した南葵楽堂は、ケンブリッジ大学のキングス・カレッジのチャペルをモデルとして、約70人が収容できる舞台と、客席数が約320席の小規模なものであったが、これはすべて頼貞の希望によるものである。建物の構造については坪田（2001）が詳細な調査を行っている。表1に一部を引用する（坪田、2001:98）。

表1 南葵楽堂の概要

様式	内外の構造ともに1820～30年頃イギリスでさかんに取り入れられたクラシックスタイルで、教化・修養・芸術など高尚な目的に使用するには最も適切と考えられた。
面積	間口7間（約13m）、奥行き15間（約27m）、高さ地面より6間半（約11m）、地下室がある。建坪およそ100坪。
間取	メインフロアは全部演壇と聴衆席にあてる。半地下室に会議集会室・音楽図書室・客室・休憩室2室・事務室・電力室・便所・使丁室などを設けた。玄関とクロークルームを正面入口に置き、その階上には聴衆が入ることができる設備を加えた。3階には小控室2室がある。
材料	堅牢な建物とするため煉瓦・鉄筋コンクリート合成とし、屋上は鉄筋コンクリートの上にスレートを張り、建物の外側面は白色タイルで覆った。玄関には白色マールを敷き、正面にあたる柱には稲田産花崗岩を用いた。内部の側壁や演壇・戸・扉をはじめ備え付け座席・机などはすべてオーク材を用い、努めて装飾を省き、音響効果のため天井にフェルトを張り、カーテンの貼り付けにも注意を払った。フェルト張り天井は世界の建築界でも初めての試みであった。

そして、頼貞が音楽堂を設立するにあたり、パイプオルガンを設置することを考えた。音楽堂へのパイプオルガンの設置について、頼貞は田村寛定へ宛てた便りや自伝の中で、次のように述べている。

私はオルガンを持つて歸るつもりです、オルガンと云つてもハーモニュームの事ではないのです、勿論パイプオルガンは高いものですがせいぜい一萬五六千圓位ふんばつて買つていつて日本で之に合ふ様な小さい音楽堂を作つて見ようかとも思つて居ます、勿論個人の仕事ですからろくなものは出来ませんがね（徳川、1915b: 79）

音楽堂の設計と共に、直ちに私の頭に浮かんだのは、その音楽堂に装置すべき、音楽堂としては是非ともなければならぬパイプ・オルガンであつた。

その頃日本にはパイプ・オルガンといふものは一つも無かつた。規模は小さくとも、名實共に理想的な音楽堂を建設したいといふのが私の念願である（徳川、1943: 74）

ここから、頼貞がパイプオルガンを必須のものと考えていたことがわかる。西洋音楽専用のコンサートホールのシンボルとも言えるパイプオルガンを設置することにより、頼貞はそれまでの日本の演奏会場との確固たる差別化を図ったのだ。それでは、頼貞の理想とするホールでは、どのような演奏会が行われたのだろうか。

### 3. 南葵楽堂での演奏会

#### (1) 南葵楽堂演奏会の概要

表2に南葵楽堂で行われた演奏会の一覧<sup>4</sup>を示す。表を作成するにあたり、現存している演奏会のプログラム<sup>5</sup>、『Nanki Concert Hall』<sup>6</sup>、『南葵音楽事業部摘要第1』<sup>7</sup>を参照した。これらの資料は、それぞれ欠けている演奏会や、資料間で曲目の不一致があるものが存在する。そのため、今回統合するにあたって、演奏会プログラムを最も優先順位の高いものとし、次に事業報告書である『南葵音楽事業部摘要第1』、そしてそれらを補完する形で外部機関の発行物である『Nanki Concert Hall』を用いた。

南葵楽堂では1918（大正7）年の開堂後、1923（大正12）年に閉鎖されるまでの5年間に様々な演奏会が開催された。現在曲目まで確認できている演奏会は計19ある。なお、演奏された作品は全部で128曲ある。表2を見ると、おおよそ春・秋の時期に演奏会を催していることがわかる。なお、1921（大正10）年には頼貞が欧州外遊をしており、演奏会が一度も行われていない。

#### (2) 想定された聴衆

当時開かれていた西洋音楽の演奏会の中には、日比谷公園の野外音楽堂で開かれていた軍楽隊による演奏会のように、広く一般の聴衆を対象とした演奏会などもあり、そこでは西洋音楽に馴染みのない聴衆も想定して日本音楽も織り交ぜた選曲がなされていた。では、南葵楽堂での演奏会の場合はどうであったのだろうか。

朝日新聞の1916（大正5）年1月13日の記事に、南葵楽堂の演奏会の方針がわかる記述がある。記事の中で頼貞は、「私のホールで演奏する音楽は通俗的のものではなくしたい、通俗的の音楽はいくらも他で聞く事は出来るし、それでは立派な音楽は出来ない、成るべく高級趣味の音楽を極熱心な真面目な少数の人に聞いて貰ひたいと思ふ」と述べている。南葵楽堂では西洋芸術音楽以外に分類されるような作品は演奏されなかった<sup>8</sup>。東京音楽学校奏楽堂を含め、当時南葵楽堂以外の演奏会場では、上演される作品のジャンルが厳密に決められておらず、日本音楽を含めた多様な作品が演奏されていた。一方、南葵楽堂は西洋芸術音楽の演奏に特化して設計されており、演奏される曲目においても邦楽などの他ジャンルの曲目は上演されなかった。

この姿勢は、配布されていた演奏会のプログラムからも読み取ることができる。図1に示したのは、1919年2月16日に開催された演奏会で配布されたプログラムである。これが南葵楽堂での演奏会プログラムのフォーマットになっており、特別な演奏会以外ではいずれもこの様式で作成されている。プログラムを見るとすべて英語<sup>9</sup>で書かれているが、ここから聴衆が英語を習得していることが想定されていることが読み取れ、一定以上の知識を身に着けたエリート層を対象としていることがわかる。

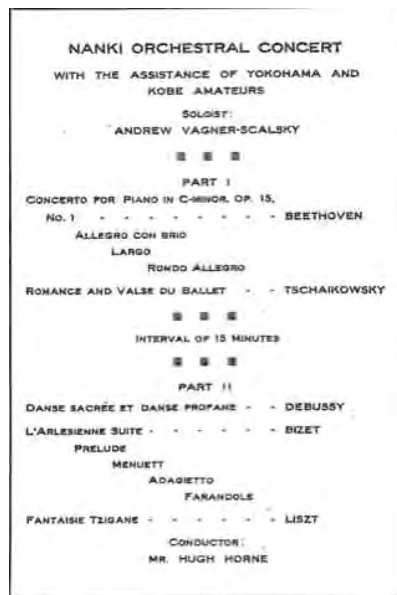


図1 南葵楽堂の演奏会プログラム例（1919年2月16日）

表2 南葵楽堂演奏会一覧

No.	日時	演奏会名	演奏者				プログラム	解説
			指揮者	独奏者	管弦楽	その他（合唱・伴奏等）		
1	1918年 10月27日、 28日	第一回秋期音楽会	グスタフ・クローン	パウル・ショルツ (ピアノ)	東京音楽学校 職員・卒業生 海軍音楽隊有志		○	
2	1919年 2月16日	横浜・神戸外人愛 好家演奏会	ヒュー・ホーン	ワグナー・スカルスキー (ピアノ)	横浜・神戸 外人好楽家	○		

3	1919年 5月4日	横浜外人愛好家 演奏会	チャールス・ H・ソーン	レオポドルスキー (ピアノ) B・ゲルシュゴーン (ヴァイオリン) Miss Allchin (ソプラノ)	横浜外人好楽家		○	
4	1919年 12月14日	第二回秋期音楽会	グスタフ・ クローン		東京音楽学校 職員・卒業生 海軍軍楽隊有志	東京音楽学校 男女生徒合唱団	○	
5	1920年 3月18日	基督教青年会 シベリヤ救済資金 寄付音楽演奏会	ヒュー・ ホーン		横浜・神戸 外人好楽家	東京横浜合唱団(合唱)		
6	1920年 5月8日	春期音楽会	チャールス・ H・ソーン		横浜外人好楽家			
7	1920年 11月22日	パイプオルガン 特別音楽演奏会	グスタフ・ クローン	ホグミル・シコラ (チェロ) 中田章(パイプオルガン) 安藤幸子(ヴァイオリン)	東京音楽学校 職員・生徒	パウル・ショルツ (ピアノ伴奏) エドワード・ガント レット(オルガン伴奏)		
8	1920年 11月23日、 24日	臨時音楽演奏会	横枕文四郎	武岡鶴代(ソプラノ) ホグミル・シコラ (チェロ)		Mrs. Hillberg (ピアノ伴奏) エドワード・ガント レット(オルガン伴奏)	○	○
9	1920年 12月11日	ベートーヴェン 生誕百五十年紀年 音楽会	グスタフ・ クローン	長坂好子(ソプラノ) 小倉末子(ピアノ)	東京音楽学校 職員・卒業生 海軍軍楽隊有志	東京音楽学校男女生徒 合唱団	○	○
10	1920年 12月12日	臨時音楽演奏会	横枕文四郎	柴田秀子(メゾソプラノ) ヒュー・ホーン (パイプオルガン)				
11	1922年 4月20日	英国皇太子歓迎 音楽会	Sauel Fairfield	武岡鶴代(ソプラノ) 花島(柴田)秀子 (メゾソプラノ)	英国軍艦レナウ ン号乗組員軍楽 隊			
12	1922年 5月21日	三浦環音楽会	アルド・フラン ケッティ	三浦環		榊原直(ピアノ) 多忠亮(ヴァイオリン) 平井保三(チェロ) エドワード・ガント レット(オルガン伴奏)	○	
13	1922年 5月22日、 23日	南葵楽堂オーケス トラ演奏会	グリエルモ・ ドヴォラヴィ ッチ	窪兼雅 (独奏ヴァイオリン) 多基永 (チェロ)	東京スイムフォ ニーオーケスト ラ?	芝祐丞 (1st ヴァイオリン) 多忠直 (2nd ヴァイオリン) 山井基清?(ヴィオラ) 多基永(チェロ)	○	○
14	1922年 5月28日	春季音楽会	グスタフ・ クローン	小倉末子(ピアノ) 萩原英一(ピアノ)	東京音楽学校 職員・卒業生 海軍軍楽隊有志		○	
15	1922年 11月4日、 5日	The Orchestral Concert	グリエルモ・ ドヴォラヴィ ッチ	窪兼雅 (第一ヴァイオリン) 芝祐丞 (第二ヴァイオリン)	東京スイムフォ ニーオーケスト ラ?		○	○
16	1923年 4月28日	ヴァイロン・ チェルロ独奏会		ヨーゼフ・ホルマン (チェロ)		Mr. Willy Bardas ? (ピアノ伴奏)		
17	1923年 5月26日	ホルマン告別 音楽会		ヨーゼフ・ホルマン (チェロ)		Mr. Willy Bardas (ピアノ伴奏)	○	
18	1923年 6月10日	春季音楽会	グスタフ・ クローン	ヨーゼフ・ホルマン (チェロ) 安藤幸子(ヴァイオリン) 大塚淳(ヴィオラ)	東京音楽学校 職員・卒業生 海軍軍楽隊有志	東京音楽学校男女生徒 合唱団?	○	
19	1923年 6月18日	ピアストロ氏 ヴァイオリン リサイタル		ミシェル・ピアストロ (ヴァイオリン)		ヒュー・ホーン (ピアノ伴奏)		

注1：プログラム、解説の欄の○は、現物が現存していることを表している。

注2：プログラムに記載がないが、演奏していたことが想定される演奏者には「？」をつけて記載している。

注3：演奏会名や演奏者は、事業報告書で日本語表記がわかるものは日本語で表記した。



### (3) 東京音楽学校の職員・生徒による演奏会

東京音楽学校の職員・生徒による演奏会は大別すると「開堂記念演奏会」、「春季・秋季演奏会」、「パイプオルガン演奏会」、そして前述した「ベートーヴェン生誕百五十年紀年音楽会」の4つに分けられる。南葵楽堂における演奏会において、特に（海軍軍楽隊の有志<sup>10</sup>を加えた）東京音楽学校のメンバーによる演奏会が3分の1以上を占めており、恒常的に行われている。このことから、東京音楽学校による演奏会が、定期演奏会として南葵楽堂の演奏会の基軸となっていたことがわかる。また、ベートーヴェン生誕百五十年紀年音楽会やパイプオルガン演奏会など、南葵楽堂における重要な演奏会も、東京音楽学校のメンバーによって行われていた。

第一回秋季演奏会（表2、No.1）とされている開堂記念演奏会では、「上野音楽学校教師クローン氏の指揮のもとに東京音楽学校職員生徒とこれに海軍軍楽隊が加わった混成管弦楽団およそ80名」によって演奏された（徳川、1943: 224）。曲目は頼貞の意向により、すべてベートーヴェンの作品で組まれた。演奏会の評価については、翌日の新聞記事でも以下のように取り上げられており、概ね好調な始まりであった。

「雨の為に来賓は思ったよりも少かったが、一族の夫人達から女流音楽家の甲乙及び好楽家を集めた床しい心地のする会であった」（朝日新聞、1918.10.28）

「ペトログラード以東の大音楽会とも称すべき会でした」

2曲目に関しては「少し乱調子であったやうに思ふ」が、「全体に於て、真剣によく難曲をやりこなせたのが嬉しく思はれた」（読売新聞、1918.10.28）

東京音楽学校の演奏会は以降定期的に行われており、それぞれ春季演奏会、秋季演奏会となっている。しかし、第1回以降の東京音楽学校が組んだプログラムは、必ずしも頼貞の意図したプログラムではなかった。頼貞は南葵楽堂で開催する演奏会について、当初すべて日本初演の作品を取り上げることが望んでいた。それに対して東京音楽学校側が組んだプログラムは、第一回秋期音楽会を除いて、おおよそ<sup>11</sup>東京音楽学校で開かれた定期演奏会のプログラムを持ち越したものであった。頼貞と親交があり、南葵文庫にも深く関わっていた音楽学者の遠藤宏によれば、頼貞は多額の報酬を払っていたのに対して、持ち越しの曲しか演奏しないことに不満をもらしていたようである。

他に東京音楽学校のメンバーによって行われた演奏会において、特筆すべきものとしてはパイプオルガン演奏会（表2、No.7）とベートーヴェン生誕150年紀年音楽会（表2、No.9）が挙げられる。パイプオルガンに関しては東京音楽学校以外の演奏者によっても演奏が行われているため後述する。

### (4) 国内外の著名なソリストによる演奏会

南葵楽堂での演奏会では、当時の著名な演奏家を招いて演奏会を行っている。海外の演奏者で

はチェリストのボグミル・シコラ Bogumil Sykora (1890-1953) やヨーゼフ・ホルマン Joseph Hollman (1852-1926) が演奏を行っている。彼らは頼貞と親交のあった演奏家である。シコラに関しては、来日することを知った頼貞が、1918年に横浜のゲーテ座で開かれたシコラの演奏会を聴きに行った際に、楽屋に向いて自宅に招待している(徳川、1943: 101)。ホルマンに関しては、イギリス留学時にパリを訪れた際に交流を持ち、ホルマンの来日にあたって演奏会を開くこととなった(徳川、1943: 213-214)。

日本人では、当時を代表する声楽家の三浦環(1884-1946)が独奏演奏会を開いている。しかし、南葵楽堂での演奏の内容は十分なものではなかったようで、「夫人の曲目は真摯を欠き、独唱もまた極めて真面目性の稀薄なものであつた」(『音楽』、1922: 22)と酷評されている。

上記のいずれの演奏家も東京を中心として各地で演奏会を行っていたが、頼貞との個人的な交友があったことから、南葵楽堂においても演奏会を行っていた。イギリスへの留学経験を通して、社交界との交流を持つことができた頼貞だからこそ、一流の演奏家と交友関係を持ち、南葵楽堂での演奏会も実現することができた。

#### (5) 雅楽伶人

雅楽伶人たちは、1922(大正11)年の春と秋に、表7のNo.13とNo.15の2回の演奏会を行っている。これまで、雅楽伶人による演奏会は、No.13の一回だと思われていた。これは『南葵音楽事業部摘要第1』において、No.13の演奏会しか報告されていなかったためである。そのため、この雅楽伶人による演奏会は、単発の演奏会として扱われており、これまで取り上げられることはなかった。

しかし、今回演奏会プログラムの調査を通して、No.15のプログラムを新たに発見するにいたった。演奏会プログラム自体は、No.13と同じ形式で作成され、各曲に手短な解説がつけられている。ここで一つ思いあたる可能性として、この演奏会が東京スィムフォニー・オーケストラによるものではなかったかということだ。東京スィムフォニー・オーケストラは、1922(大正11)年に設立された、宮内省楽部のお雇い外国人であったグリエルモ・ドヴォラヴィッチ Guglielmo Dvoravitsch (1869-1925) と雅楽伶人を中心メンバーとしたオーケストラである。後年指揮者として名を馳せたチェリストの斎藤秀雄(1902-1974)などもメンバーに含まれており、当時としてはかなり水準の高い演奏家が集まっていた。しかし、記録として1922(大正11)年4月8日の東京音楽学校での演奏会<sup>12</sup>以外、演奏記録が残っておらず、実態のよくわかっていないオーケストラであった。

南葵楽堂での演奏会は、1922年の5月と11月に一回ずつ行われており、プログラムには宮内省楽部(The section of Music of the Imperial Court)としか記載されていないが、この年はちょうど東京スィムフォニー・オーケストラが結成された年である。演奏会の指揮者はドヴォラヴィッチが務めており、両演奏会においてソリスト(あるいは弦楽四重奏)として記載されている演奏者についても、山井基清(1885-1970)を除いてみな東京スィムフォニー・オーケストラのメンバー



であった。そして、ドヴォラヴィッチは南葵楽堂の設立以前から楽部を指揮していたが、1922（大正 11）年より前にドヴォラヴィッチが指揮した演奏会はなく、伶人が積極的に関わった演奏会もなかった。これらの事柄をふまえると、設立したばかりの東京スイムフォニー・オーケストラが、南葵楽堂を演奏会場の拠点としようとしていたと考えることができる。

## (6) 横浜外国人愛好家

1919～20（大正 8～9）年において、南葵楽堂では外国人音楽愛好家による演奏会が 3 回開催されている。これらは、横浜フィルハーモニー会による演奏会であったと推測される。横浜フィルハーモニー会は、当時ゲーテ座などの横浜の主要な会場で演奏活動を行っていた、外国人居留地の音楽愛好家の管弦楽団である。南葵楽堂において、1920（大正 9）年 5 月 8 日に演奏会が行われているが、その 3 日前に、横浜フィルハーモニー会の第 6 回定期演奏会が、ゲーテ座で行われている。この時の演奏会のプログラムが、南葵楽堂で行われた演奏会とまったく同一のものであり、両者が同じ団体であると判断できる。

1919（大正 8）年 2 月 16 日の演奏会（表 7、No.2）の指揮者、ヒュー・ホーン Hugh Horne（生年不詳 -1923）<sup>13</sup> は、英国大使館において商務官を務めていた人物である。イギリスの王立音楽院で学んだオルガニストとして、当時は名が知られていた。頼貞はホーンについて「指揮者ホーン君はどの曲目も立派に指揮した。ホーン君は若い頃音楽家にならうとして倫敦の王室音楽院で勉強した人だけに指揮も素人離れがしてゐた」（徳川、1943: 119）と述べており、専門的な音楽知識を有していたことがわかる。

また、1919（大正 8）年 5 月 4 日の演奏会（表 7、No.3）の指揮者、チャールス・ソーン Charles Thorn（生没年不詳）については、「関東大震災前迄は横浜で印刷業をやる傍ら好きな音楽を楽しんでゐた人で、外国人の間では、亡くなつた英国大使館の商務官ホーン氏に次ぐ素人音楽家として知られてゐた」（徳川、1943: 124）と述べられている。

特に、1919（大正 8）年 2 月 16 日のホーンの演奏会は、次の記事から盛況であったことがわかる。

来賓は前田侯夫妻を始め朝野の貴顕淑女多く、英大使夫妻令嬢を始め外国大公使も大抵顔を見せてゐた。かくて音楽堂は 400 余名を入れて満員（読売新聞、1919 年 2 月 17 日）

また、演奏内容についても「少人数で形は不整であつたけれどもホーン氏の優れた指揮の下によく統一されて、其効果は我邦で従来聴かれた如何なる管弦楽にも劣らぬ」と高く評価されている（『音楽』、1919: 40）。

## (7) パイプオルガン演奏会

南葵楽堂の特徴のひとつとして、初めてコンサートホールにパイプオルガンを設置したことが挙げられる。1923（大正 12）年の関東大震災以前までには、現在南葵楽堂のものを含め、10 のパ

イプオルガンが確認されている<sup>14</sup>が、南葵楽堂以外のパイプオルガンは教会やミッション系スクールに導入されていたのみであり、南葵楽堂のパイプオルガンは日本で初めて建造されたコンサート用の世俗オルガンでもあった。また、規模としては当時東洋一といわれ、南葵楽堂のシンボルのような存在であった。

1920（大正9）年11月22日（表2、No.7）に、パイプオルガン披露のための特別演奏会が開催されている。この時は当時東京音楽学校の助教授をしていた中田章<sup>15</sup>（1886-1931）が、オルガン独奏<sup>16</sup>を担当している。この時、中田はヨーゼフ・ラインベルガー Josef Rheinberger(1839-1901)〈ソナタイ短調〉、ヨハン・セバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach (1685-1750)〈プレリュードニ短調〉の2曲を演奏した。なお、ラインベルガーに関して言うと、中田は1912（大正1）年にも東京音楽学校での演奏会において同曲を演奏している。

この時、南葵楽堂では2日間（1日目を招待日、2日目を一般公開）の演奏会を予定していたが、入場希望者が予定よりも大幅に上回り、さらにもう1日<sup>17</sup>演奏会を増やしている。当時の様子について、『薈庭樂話』の中で頼貞は次のように述べている。

演奏会の前日、一般来会者の入場券を交付する約束の日になると、朝の八時頃から多数の人が詰めかけた。多くは男女の学生青年紳士諸君であったが、中には晴着を着た夫人令嬢も見えてみた〔中略〕音楽会の入場者整理に警官が派遣されるなどとはその当時は稀有のことで、主催者たる私達は非常に心配した〔中略〕最初は三百枚を配布の予定のところ、その倍の六百枚<sup>18</sup>を捌いて仕舞つた（徳川、1943: 132-133）

この頼貞の反応から、パイプオルガンに対する音楽愛好家の関心がいかに強いものであったのかわかる。特に、この演奏会の前後においては東京帝国大学などを始めとして、一般大学の学生の音楽活動も盛んになっていた時期であったため、学生が多く見受けられたのも自然なことと考えられる。

また、演奏会の内容も、次のように高く評価されている。

当日の大立物たるシコラ氏の演奏はいふ迄もなく、ガントレット氏の風琴、武岡鶴代氏の独唱、皆極めて標準の高い者で、欧米の大都市の音楽堂に開かる演奏に比して、何等遜色なしとして盛に賞讃の辞を呈したのは当然の事である（『音楽界』、1921: 35）

なお、この時中田のパイプオルガン独奏は1日目のみで、2・3日目にパイプオルガンが使われたのはエドワード・ガントレット Edward Gauntlett (1868-1956)<sup>19</sup>による伴奏のみである。そのため、一般の音楽愛好家は独奏でオルガン演奏を聴くことはできなかった。一般愛好家がオルガン独奏を聴くことができたのは、1ヶ月後の1920（大正9）年12月12日、ベートーヴェン生誕紀年音楽会の翌日に開かれた演奏会（表2、No.10）においてである。この演奏会では、横枕文四郎

の指揮による海軍軍楽隊による管絃楽演奏と共に、前述した横浜のオルガニストであるヒュー・ホーンがパイプオルガン独奏を担当している（表3参照）。

表3 ヒュー・ホーンが演奏したオルガン作品一覧

作品名	作曲者
Solemn Melodie	ウォルフオード・デイヴィス
オルガン交響曲第5番第3楽章	ヴィドール
フーガニ短調	J.S. バッハ
アンダンテ変ホ長調	デュボワ
トッカータ長調	デュボワ
プレリュードとフーガ長調	メンデルスゾーン

なぜこの演奏会において、パイプオルガンの演奏が行われることになったのか、演奏会プログラムは現存しておらず、『南葵音楽事業部摘要第1』（50-51頁）にも曲目がかかれていたのみで、詳細な経緯はわからない。新聞等でも表立って取り上げられているものもなく、その演奏内容がどのようなものだったのかは不明であるため、これまでこの演奏会が話題となることはなかった。

しかし、この演奏会では、前述の中田の演奏会よりも多くのオルガン作品が演奏されている。また、抜粋ではあるがヴィドールのオルガン交響曲第5番などの規模の大きい後期ロマン派のオルガン作品が取り上げられており、南葵楽堂のパイプオルガンだからこそできる演奏会プログラムとなっている。そして、パイプオルガンの専門的な演奏技術を持つホーンが演奏を行っており、中田のパイプオルガン演奏会よりも優れた内容であったことは想像に難しくなく、日本のオルガン作品の受容において注目されるべき演奏会であったといえる。

#### 4. おわりに

本稿では、これまで部分的にしか取り上げられてこなかった南葵楽堂で行われた演奏会について、未整理であった演奏会プログラムに着目して基礎資料の整備を行った。これにより、南葵楽堂で行われていた一連の演奏会の情報を俯瞰することができるようになった。

南葵楽堂での演奏会について、これまではベートーヴェン生誕百五十年紀年音楽会のような特に目立った演奏会しか注目されてこなかったが、南葵楽堂には当時の主要な西洋音楽の担い手たちが関与しており、西洋音楽の演奏会場の拠点となっていたことがわかった。純粋に西洋芸術音楽のみの演奏会を行うという姿勢により、行われた演奏会は質の高さが重視されており、新聞や雑誌に掲載された記事をもみても、演奏会の内容は高い評価を受けていたことがわかる。

本稿では南葵楽堂での一連の演奏会について全体像を示すにとどまったが、今後は各演奏会の詳細を掘り下げていき、それぞれの演奏会が行われた経緯を解明していくことによって、どのように南葵楽堂が質の高い演奏会を実現するに至ったのかを明らかにしていく。そして、当時の日本の最高水準といえる演奏会場となっていた南葵楽堂が、日本の西洋音楽受容に果たした役割を明らかにしていきたい。

## 主要参考文献

### [演奏会プログラム]

請求記号はすべて明治学院大学図書館付属遠山一行記念日本近代音楽館のもの。

- 1919年2月16日. *Nanki Orchestral Concert with the assistance of Yokohama and Kobe amateurs.* (請求記号: 191902001)  
1919年5月4日. *Nanki Orchestral Concert with the assistance of the Yokohama Orchestral Society.* (請求記号: 191905001)  
1919年12月14日. *Nanki Orchestral Concert by the professors and graduates of the Tokyo Academy of Music with the assistance of the Imperial Naval Band.* (請求記号: 191912001)  
1920年11月22日. [南葵楽堂パイプ・オルガン披露演奏会第1日] 演奏曲目 (請求記号: 192011008)  
1920年12月11日. *Nanki Beethoven Festival.* (請求記号: 192012004)  
1922年5月21日. *Madame Tamaki Miura's concert.* (請求記号: 1922050009, 192295922)  
1922年5月22日. *Nanki Concert Orchestral.* (請求記号: 1922050023)  
1922年5月28日. *Orchestral Concert.* (請求記号: 192205014, 192205027)  
1922年11月4-5日. *Nanki Concert Orchestral.* (未整理資料)  
1923年5月26日. *Farewell Concert of Joseph Hollman.* (未整理資料)  
1923年6月10日. *Nanki Orchestral Concert.* (請求記号: 192306002)

### [新聞・雑誌]

- 朝日新聞 1916年1月13日「頼倫侯令嗣の音楽堂と図書館」朝刊、5面  
\_\_\_\_\_. 1918年10月28日「南葵楽堂の開館式 諸名士の参列華やかな夜」朝刊、5面  
読売新聞 1918年10月28日「耳を透して社会へ、頼倫侯の遊び」朝刊、5面  
\_\_\_\_\_. 1919年2月17日「春の宵に残る楽の音」朝刊、5面  
『音楽』1919年3月「海内楽壇」第10巻第3号: 40  
\_\_\_\_\_. 1922年6月「海内楽壇」第13巻第6号: 22  
『音楽界』1921年1月「楽報」第231号: 35-36

### [書籍・論文]

- 有田芳子, 後藤多恵子 1977「Document Series No. 1 南葵音楽文庫」『塔』第17号: 1-76.  
秋山龍英編 1966『日本の洋楽百年史』第一法規出版  
木村重雄 1985『現代日本のオーケストラ——歴史と作品——』日本交響楽振興財団  
篠田大基 2008「南葵音楽文庫の出版活動」『Oxalis——音楽資料デジタル・アーカイヴィング研究』第1号  
\_\_\_\_\_. 2010「1920年 麻布飯倉のベートーヴェン—南葵楽堂「ベートーヴェン生誕百五十年紀年音楽会」『Oxalis——音楽資料デジタル・アーカイヴィング研究』第3号: 21-26.  
谷村政次郎 2010『日比谷公園音楽堂のプログラム——日本吹奏楽史に輝く軍楽隊の記録』つくばね舎  
津上智美、橋本久美子、大角欣也 2011『ピアニスト小倉末子と東京音楽学校』東京芸術大学出版会  
坪田茉莉子 2001『南葵文庫 目学問・耳学問』東京都教職員互助会  
東京芸術大学百年史編集委員会 2003『東京芸術大学百年史: 演奏会篇 第1巻』音楽之友社  
徳川頼貞 1915a「英國だより」『音楽』6巻, 4号: 79  
\_\_\_\_\_. 1915b「英國だより」『音楽』6巻, 7号: 62  
\_\_\_\_\_. 1915c「英國だより」『音楽』6巻, 9号: 57-58  
\_\_\_\_\_. 1943『薈庭樂話』春陽堂書店  
徳川頼貞遺稿刊行會編 1956『頼貞隨想』河出書房  
南葵文庫編 1909-1923『南葵文庫報告』(第1-第15) 南葵文庫  
\_\_\_\_\_. 1920『南葵文庫概要』南葵文庫  
\_\_\_\_\_. 1920『南葵文庫附属御大礼奉祝紀念館大風琴』南葵文庫  
南葵音楽図書館編 1929『南葵音楽事業部摘要 第1』南葵音楽図書館  
西原稔 2000『「楽聖」ベートーヴェンの誕生: 近代国家がもつた音楽』平凡社  
正木光江 1995「南葵音楽図書館の成立過程」『音楽情報と図書館』大空社

- 増井敬二 2003『日本オペラ史～1952』水曜社  
 村上紀史郎 2012『音楽の殿様・徳川頼貞―1500億円の＜ノーブレス・オブリージュ＞』藤原書店  
 吉田實他 1985『日本のオルガン』日本オルガニスト協会  
 Japan Advertiser. 1924. *Nanki Concert Hall, Tokyo, Japan*. The Japan Advertiser Press

## 註

- <sup>1</sup> 頼貞は当時のことを鮮明には覚えていないが、ジョルジュ・ビゼー Georges Bizet (1838-1875) 作曲の歌劇《カルメン》や、ジュゼッペ・ヴェルディ Giuseppe Verdi (1813-1901) 作曲の歌劇《トロヴァトーレ》などの当時バリエで流行していた作品のレコードであったと記憶している (徳川、1943: 6-7)。
- <sup>2</sup> 徳川頼貞は、自伝『菩提樂話』の中で、ヴァイオリニストのミッシェル・エルマン Mischa Elman (1891-1967) や、チェリストのヨーゼフ・ホルマン Joseph Hollman (1852-1926) らとの交流について記している。
- <sup>3</sup> ブルメル・トーマスは、ウェストミンスター美術学校で学んだ建築家で、北アイルランドの都市ベルファストの公会堂設計のコンペティションにおいて一等賞を獲得し、音響について高い評価を受けていた。
- <sup>4</sup> 表2には演奏会プログラムが把握できているものをすべて記載した。『南葵音楽事業部摘要第1』によれば、表2に記載した以外にも宮内省楽部や音楽奨励会に十数回楽堂を提供したとされている (南葵音楽図書館編、1929: 56)。なお、表2のNo.19は音楽奨励会によって主催されたものである。
- <sup>5</sup> 本調査で現物を確認したプログラムは、すべて明治学院大学図書館付属遠山一行記念日本近代音楽館に所蔵されているものである。
- <sup>6</sup> The Japan Advertiser Press (Japan Times の前身の新聞社) によって、1924 (大正 13) 年に出版された南葵楽堂の演奏会プログラム一覧。
- <sup>7</sup> 1929 (昭和 4) 年に南葵音楽事業部が刊行した事業報告書。一連の演奏会プログラムが掲載されている。
- <sup>8</sup> 1922 (大正 11) 年 4 月 20 日に行われた「英国皇太子歓迎音楽会」のような場で、例外的に「君が代」などが演奏されることはあった。
- <sup>9</sup> 一部の演奏会では、英語ではなくフランス語で書かれているものもある。
- <sup>10</sup> 当時東京音楽学校のメンバーのみで管絃楽の編成をそろえることが難しく、軍楽隊から欠員を補充することが多かった。
- <sup>11</sup> 1、2 曲の新曲が挿入 (もしくは差し替え) されているものもあるが、すべての演奏会において直前に東京音楽学校で演奏されたプログラムと共通する曲がみられる。例えば 1923 (大正 12) 年 6 月 10 日の春季演奏会 (表 2、No.18) では、南葵楽堂の方が曲数は少なくなっているが、演奏されている曲目は 1923 (大正 12) 年 5 月 19、20 日に行われた東京音楽学校第 44 回定期演奏会 (東京芸術大学百年史編集委員会、2003: 555-556) のものとはほぼ同一である。曲順は異なっており、南葵楽堂での演奏会では新たにシャルル・マリー・ヴィドール Charles-Marie Widor (1844-1937) 作曲の〈組曲ホ短調〉より「カンツォネッタ」が挿入されている。
- <sup>12</sup> この時の演奏曲目とメンバーは『日本の洋楽百年史』の 346-347 頁に記載されている。
- <sup>13</sup> 関東大震災の際に、イギリス大使館のがれきに埋もれてしまい、亡くなっている。なお、1921 年に頼貞が外遊した際、ホーンを通じてサー・ヘンリー・ウッド Sir Henry Wood (1869-1944) の紹介状をもらっている。その際、ウッドを通じて南葵楽堂に常備するためのコントラバス 3 台を購入している (震災後は東京音楽学校に寄贈)。
- <sup>14</sup> 吉田實他 1985『日本のオルガン』日本オルガニスト協会
- <sup>15</sup> 日本のオルガニストの草分けである島崎赤太郎 (1874-1933) の弟子であり、唱歌〈早春賦〉の作曲家として知られている。
- <sup>16</sup> 南葵楽堂のパイプオルガンの管理を任されていたイギリス人オルガン技師のエドワード・ガントレットが、J.S. バッハ〈G 線上のアリア〉とジュゼッペ・タルティーニ Giuseppe Tartini (1692-1770) 〈アンダンテ・カンタービレ〉のオルガン伴奏を担当している。
- <sup>17</sup> 演奏曲目は 2 日目の一般公開されたものと同様。
- <sup>18</sup> 1 日目の招待日と合わせて、3 日間で約 900 人が演奏を聴いたと思われる。
- <sup>19</sup> ガントレットは山田耕伴 (1886-1965) の義兄であり、少年時代の山田に音楽を教えた人物として知られている。オルガンに精通しており、南葵楽堂のパイプオルガンの管理を任されていた。



